

「おもしろい」「ことと」「放っておけない」「ことを追いかけて

——「あとがき」にかえて——

この文章を書いている間にも、デンマークで風刺漫画家を狙ったテロ事件が起きた、トルコでは人質が解放されたなど、「イスラム国」に関する報道が絶え間なくもたらされ、落ち着かない状況である。

日本人の二人の人質がもしかしたら生きて戻れるかもしれない可能性がまだあった頃、親しい人にふと、

「どうして後藤健二さんは二度まで湯川遥菜さんを探しにシリアへ行ったんだろう」

と聞いたら、

「きつと、おもしろい奴で、放っておけなかったんだろうね」

という返事が返ってきた。

聞いた直後は、ずいぶんナイーブな答えだなあと思ったのだが、日が経つに連れて沁みて来るものがある。

「おもしろい」ということばは時に不謹慎に響くこともあるが、「正しさ」や「常識」の欺瞞をすり抜けて、さまざま可能性へとわたしたちの背中を押してくれる奥行きを持っている。自分には無いと思っていたもの——しかし惹かれることで、自分の中にもそれに呼応するものが見つかる瞬間とでも言った方がいいか。

「放っておけない」の方を考えようとすると、どういうわけか夏目漱石の、写生文家が描く対象に向かう姿勢について記した一節が思い浮かんで来る。「大人が子供を視るの態度」「両親が児童に対するの態度」というあれである。「親は小児に対して無慈悲ではない、冷刻でもない。無論同情がある。同情はあるけれども駄菓子を落としたり子供と共に大声を揚げて泣く

様な同情は持たぬのである。写生作家の人間に対する同情は叙述されたる人間と共に頑是なく煩悶し、無体に号泣し、直角に跳躍し、一散に狂奔する底の同情ではない。傍から見て気の毒の念に堪へぬ裏に微笑を包む同情である」(「写生文」、一九〇七)とあるように、先んじている者が後から来る者の難儀を見るときに動く気持ちである。とはいえ、これが机上を離れて現実に通きかけるとなると、先んじている者に必ずしも特効薬のような打開策があるわけではなく、煩悶や号泣、跳躍、狂奔を繰り返すはめになるのだが。

二月一日、この日は早稲田大学で私が教え子の大場黎亜さんと実施している講演会シリーズ「被災地の声を聴く」の二〇一四年度の最終回で、福島県の立高校の国語教諭で詩人の、和合亮一さんをお迎えする日だったのだが、早朝に後藤さんが殺害されたと見られる動画がインターネットに公開された。和合さんは講演の最後に、この日創作された詩「後藤健二さんを想う 2. 1」を朗読して下さった。

悲しみを杖にして

歩いていきましよう

ひたすらに

杖はそのたびに

きみの心に

痛みをもたらすでしょう

それでも

しっかりと握って

道なき道を

涙をこぼしながら

聴いた直後にはやはり、ナイーブな詩だなと感じたが、時間を重ねるに従って「悲しみの杖」のイメージを探り続ける自分が確かにいて、この詩のことばに棲み憑かれたと思う。

二〇一五年も各々が、「おもしろい」ことと「放っておけない」ことに向かって、働きかけ、ことばを繰り出す一年になるのだろうが、うろたえたり歯ぎしりしながら、どこまでも自分のやり方を手探りして行きたいものである。

また、この論集をはじめとして、そうして葛藤する者同士が、切磋琢磨して自他を伸ばす「場作り」が出来たらいいと、切に願っている。

(金井 景子)